

論考「江戸時代の象牙輸入の状況について」

Study of the historical fact of the Japanese ivory import of the Edo era

発表年月：平成 19 年 6 月 24 日

著者：山口真吾（日本根付研究会会員）Shingo Yamaguchi

shingo5@mvc.biglobe.ne.jp

要旨

この論考は、江戸時代から現代までの我が国の象牙の輸入などの状況について、輸入量や価格などに着目して検証することにより、18 世紀において製作された象牙製の根付の成立可能性について論証したものである。

【本論考の構成】

本論

- 第 1 章 我が国の象牙輸入量の推移について
- 第 2 章 象牙の消費形態と一人あたりの消費量について
- 第 3 章 明治時代の象牙材の価格について
- 第 4 章 18 世紀の根付製作で消費された象牙の総量について
- 第 5 章 結論

付録

- 小論考
- 参考図表
- 参考文献
- 謝辞

第 1 章 我が国の象牙輸入量の推移について

1.1 我が国の象牙輸入の統計

我が国の象牙の輸入状況を知るには、貿易に関する統計類を確認する必要がある。

まず、江戸時代については、唐人貿易や南蛮貿易、朱印船貿易に関する研究における統計を参考にすることができる。

一方、明治時代以降については、日本政府が整備してきた「日本外国貿易年表」などの貿易統計があり、また近年は、絶滅の危機にある野生生物保護のためのワシントン条

約に関連して、象牙輸入に関する研究論文が国内外で発表されている。

1.2 江戸時代の象牙の輸入状況

(1) 朱印船貿易 (17世紀)

寛永11年(1634年)のシャム(タイ国)から日本への輸出に関する当時のオランダ人の報告記録によると、象牙は1,500-2,000斤(1斤が約0.6kgとして900kg-1,200kg)が朱印船貿易(朱印状を与えられた船による貿易)により日本に輸出されたことが分かっている。(岩生成一、昭和33年)

これはタイからの輸出品であり、当時の朱印船貿易において他の輸出国(例えば、スリランカ、カンボジア、ベトナム)からも日本への輸出があったことを考慮すれば、総量として更に多くの象牙輸出があったことが推測できる。

(2) 唐船貿易 (17世紀~19世紀)

^{とうせん}唐船と呼ばれる船を用いて日本との交易を行っていた中国人については、元禄6年(1693年)には年間70隻、宝永元年(1704年)から宝永4年(1707年)には毎年80隻の唐船が日本にやってくるなど、活発な貿易が行われていた。(山脇悌二郎、1964)

正徳元年(1711年)の年間を通じた唐人貿易においては、長崎に年間を通じて54隻の唐船が入港して、合計720斤(432kg)の象牙が輸入されている。また、19世紀初頭の文化元年(1804年)には、年間を通して11隻の唐船が入港して、合計19,540斤(11,724kg)の象牙が輸入されている。(山脇悌二郎、1964)(小論考1-1)

このように、1804年の時点で約12トンの輸入があったことから、18世紀中には既に唐船貿易により年間10トンクラスの象牙輸入が実現していたと考えられる。

(3) 南蛮貿易 (18世紀)

江戸時代には南蛮貿易によってオランダ人からも象牙を輸入していた。長崎の出島における宝永4年(1707年)の年間の輸入品目には、総輸入727,204グルデンのうち“象牙、水牛、牛の角、鼈甲”が0.3%を占めていたとの記録がある。(長崎大学薬学部)

この宝永4年に輸入した“象牙、水牛、牛の角、鼈甲”は、現在の価値に換算すると約1,200万円となり、仮にこれらの4品目の輸入額が均等であると仮定すると、象牙の輸入額は300万円分に値する。(小論考1-2)

この300万円分の象牙の量についてであるが、我が国の象牙輸入のピークを迎えつつあった1970年から1979年までの10年間における貿易統計上の輸入価格(キログラムあたり約12,000円)(参考図表3)で換算すれば、約250kg分の象牙の輸入があった計算になる。

(4) まとめ

江戸時代の象牙輸入量は、唐人貿易及び南蛮貿易の両方の貿易量の和となる。

『装剣奇賞』(天明元年(1781年))に掲載された根付師達が活躍した18世紀中には、上記より、年間あたり数百kgから10トン台の間の輸入量で推移したことが分かる。

時代	年間輸入量
江戸時代(18世紀)	数百kg～10トン台

1.3 明治時代以降の象牙の輸入状況

明治以降の輸入実績は、大蔵省が発行した「日本外国貿易年表」などの統計類から明らかになっている。

明治15年以降の各年の輸入量は表1-1のとおりである。明治初期には第1回内国勸業博覧会(明治10年(1877年))が政府主催によって開催されるなど、工芸品の輸出が奨励されていたが、当時の平均輸入量は8.3トン(年)であることが分かる。(Esmond Bradley Martin、1985)

表1-1 明治時代初期の我が国の象牙輸入量

年	年間輸入量
明治15年(1882)	10.18トン
明治16年(1883)	2.59トン
明治17年(1884)	6.94トン
明治18年(1885)	6.71トン
明治19年(1886)	9トン
明治20年(1887)	11.68トン
明治21年(1888)	8.45トン
明治22年(1889)	10.88トン
8年間の平均	8.3トン

(出典: Esmond Bradley Martin、1985)

また、明治から現代までの輸入量については、10年ごとの平均値に換算すると表1-2のとおりとなる。(参考図表1)

これによると、明治時代の輸入量は年間8トンから10トン台の範囲で推移しているが、大正時代と戦後の高度経済成長期の2度にわたり輸入が急増していることが分かる。

太平洋戦争中は贅沢品である象牙の輸入が抑制されたため、極端に低い輸入量となっ

ている。我が国における象牙輸入のピークは1983年であり、年間476トンもの輸入があった。

なお、1990年以降はワシントン条約(「絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約」)の国際約束の履行のため、基本的には象牙輸入が途絶えている状況にある。例外的な措置として、1999年に50トンの輸入が認められたほか、2007年6月には南アフリカ、ボツワナ、ナミビアの3カ国が保有する計約60トンの日本への輸出がワシントン条約締約国会議により認められた。

表 1-2 明治時代から現代までの象牙輸入量

期 間	年間平均輸入量
1882年-1889年	8.3トン
1890年-1899年	19.0トン
1900年-1909年	17.4トン
1910年-1919年	50.8トン
1920年-1929年	78.0トン
1930年-1939年	57.3トン
1940年-1949年	3.8トン
1950年-1959年	70.4トン
1960年-1969年	94.9トン
1970年-1979年	254.7トン
1980年-1989年	237.3トン
1990年-1999年	5トン
2000年-2006年	0トン

(出典：Esmond Bradley Martin、1985 等)

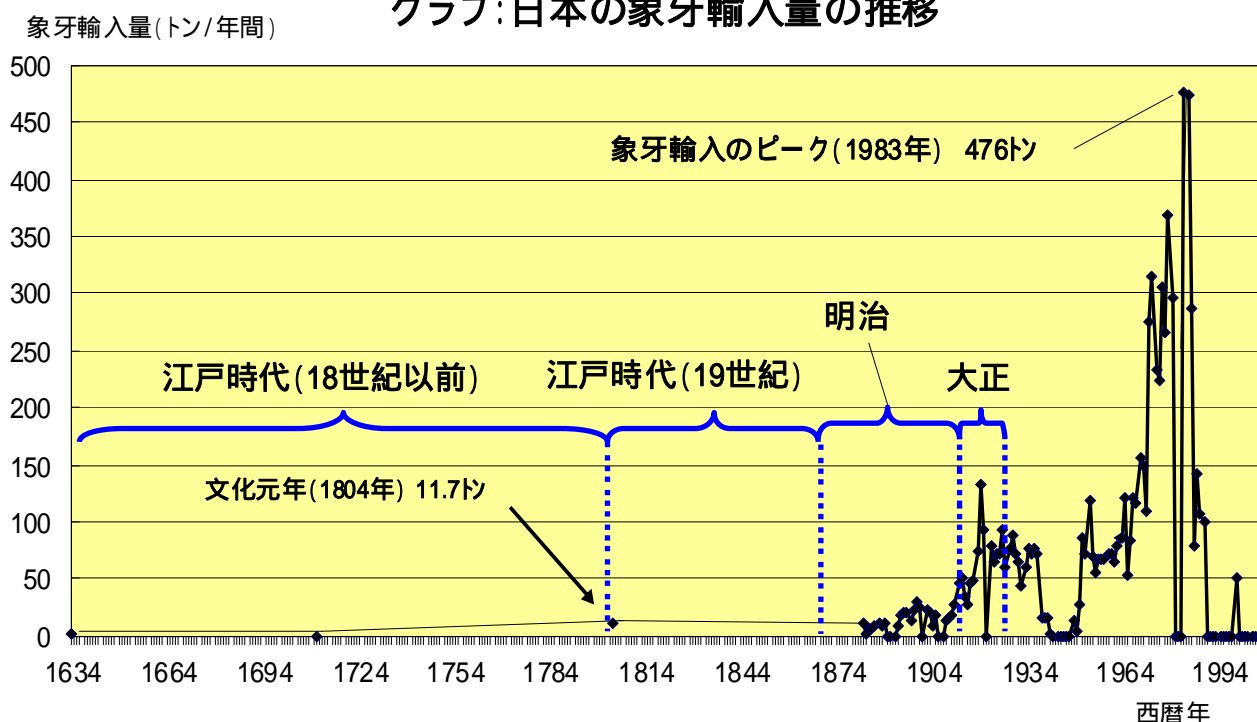
1.4 江戸時代から明治時代にかけての輸入量の変化

我が国の象牙輸入量は、グラフのとおり、18世紀から明治時代末期にかけては、数百kgから10トン台の年間輸入量で推移している。(小論考1-3)

輸入量が急増したのは「大正時代」及び「戦後の高度経済成長期」であり、明治時代には急増していない。むしろ、明治時代には、文化元年(1804年)の輸入量(約12トン)よりも輸入量が少なかった期間すらあった。

また、文化元年(1804年)の輸入量と明治時代中期～末期(1890年-1899年)の平均輸入量(19トン)を比較すると、100年間に約1.6倍の増加となる。これは、複利計算を行えば、年率わずか0.48%の増加に過ぎない。

グラフ:日本の象牙輸入量の推移



1.5 小結論

- 唐人貿易や南蛮貿易により、18世紀の時点で既に相当量の象牙が日本に輸入されていた。輸入量は、唐人貿易及び南蛮貿易の貿易量の和となるが、18世紀には年間数百kgから10トン台の輸入があった。
- 輸入量の水準は、江戸時代から明治時代に移行しても不変であり、明治時代の末期まで変わらなかった。我が国の輸入量が最初に急増したのは大正時代であり、明治維新による開国は、直接的には輸入量に影響を与えていない。
- 明治時代には東京だけでも500名近くの牙彫業者が存在して、象牙製品が活発に生産されていた。(高村光雲)ところが、18世紀には、明治時代と同じ水準の量の象牙が輸入されていた。ということは、逆に考えれば、18世紀においても明治と同量の象牙製品が活発に生産されていた、ということになる。
- さらに言えば、“明治時代に輸出用の象牙作品が大量生産されていた”ことが事実だとすると、専ら国内消費に限られていた江戸時代においては、むしろ、それ以上の量の根付を含めた象牙製品が市中に溢れていたこととなる。

第2章 象牙の消費形態と一人あたりの消費量について

2.1 江戸時代の消費形態

江戸時代に輸入された象牙は、多様な用途に消費されていた。

江戸時代には角細工職人^{つのざいくしよくにん}として、象牙や角類を用いながら、根付、緒締め、茶道の象牙蓋、鉄砲の薬入れ、三味線の撥^{ばち}、櫛^{くしばらい}（櫛に付いた汚れを取る道具）などを製作する職人がいた。（人倫訓蒙図集、元禄3年（1690））

これら以外にも、双六のサイコロ、印章、掛け物の軸としても象牙が使用されたことが分かっている。（黒川道祐、貞享3年（1686））

また、『装剣奇賞』（1781）に掲載されている57名の根付師のうち、材料に象牙を使用する者として、小笠原一斎、勘十郎、田原屋傳兵衛、奉真、佐武宗七、正直、岡友、印齋、中山大和女らの氏名が挙げられている。さらに、友忠や吉長のように象牙を使用するもののその旨が『装剣奇賞』で記載漏れとなっている者も加味すると、相当数の根付師が象牙を消費していたことが分かる。

2.2 江戸時代の奢侈禁止令の影響

江戸時代には奢侈禁止令が出され、華美な象牙の装飾品は取り締まりの対象になっていたと考えられる。しかし、江戸時代を通じて数度にわたり禁止令が発令されたことから分かる通り、命令が遵守されたのは発令直後までであって、当時の規制は次第に形骸化したといわれている。

よって、象牙製の根付は、一時的には規制の対象になったとしても、江戸時代を通じて常に禁止されていたものではないことが分かる。よって、奢侈禁止令が発令された事実をもって“象牙製根付や大型根付が江戸時代に常に禁止されていた”ということにはならない。

2.3 江戸時代の富裕層による消費

象牙は貿易でもたらされたものであり、加工品を購入することができたのは、武士や豪商といった一部の特権階級たる富裕層であった。実際、18世紀の唐人貿易において象牙とともに輸入された物品を確認すると、反物や薬物、香料、皮革、べっ甲、書物などであり、農民や巷の商人が容易に手に入れられるような性質のものではなかった。（山脇悌二郎、1964）

江戸時代の「富裕層」について明確な定義があるわけではないが、現代で例えるな

らば、いわゆる“長者番付”と呼ばれる国税庁の「全国高額納税者名簿」(所得税納税額が1,000万円超の個人)をモデルにすることができる。2004年度の公示では、対象者は約7.4万人が該当しており、日本の人口比では0.06%に相当する。(総務省統計局「人口推計月報」)

江戸時代で同じ人口比を用いて「富裕層」を定義して、人口約3,000万人の江戸時代に年間約10トンの象牙が輸入されたと仮定すると、江戸時代の富裕層(3,000万人×0.2(武家+町人)×富裕層(上位0.06%)=3,600人)の一人あたりの象牙消費量は、約2.77kgと試算される。(小論考2-1)

また、江戸時代には三味線の撥やサイコロ、櫛払といった身近な品物にも象牙が使用されていたことを踏まえれば、この「富裕層」以外に消費層は広がっていた可能性がある。よって、江戸時代の「富裕層」が武士や商人階級の人口の上位1%と広めに仮定した場合、同様の計算により、一人あたり約167gの象牙の割り当てとなる。この167gの象牙材は、大型の象牙根付を1個分製作するのに十分な量である。(小論考4-5)

江戸時代の富裕層の定義	一人あたりの象牙消費量
人口(農民を除く)の上位0.06%	約2.77kg(年間)
人口(農民を除く)の上位1%	約167g(年間)

2.4 現代の大量消費の状況

日本は、高度経済成長とともに1970年代には象牙の消費大国となり、年間平均約255トンを入力した。当時の輸入は、46%はザイール産、26%がケニア産、9%がコンゴ産、7%がタンザニア産、4%が中央アフリカ共和国産であった。(Esmond Bradley Martin、1985)

輸入された象牙の約55%は個人や企業の印鑑として消費され、残りは彫刻、根付、アクセサリ、ピアノの鍵盤などに消費された。1980年の輸入では、置物や根付の製作のために消費されたのは、輸入量の5%(約10トン)である。(Esmond Bradley Martin、1985)

表2-1 輸入象牙の日本の消費方法(1980年)

製品	割合
印鑑	55%
装飾品(主に女性用装身具)	20%
楽器の部品(三味線、琴、琵琶、撥、ピアノ、ギター)	10%
置物、根付	5%
その他(ガレット刺ダ、杖の柄、耳かき、はし、靴べら、麻雀パイ、パイプなど)	10%

出典: Esmond Bradley Martin、1985

象牙の消費大国となった原因は、高度経済成長である。経済成長とともに国民総生産（GNP）が世界第2位へと躍進し、全国民の9割までが中流意識を持つに至った。このため、豊かになった個人が、象牙製の装身具や楽器、印鑑を所有できるようになったのである。電動工具が発達して印鑑の大量生産が可能になったことも、消費を後押しした。

仮に、高度経済成長期の日本の全世帯（4000万世帯）のうち、一割が象牙製の印鑑を購入したとすると、約104トンの象牙を消費する計算になる。（小論考2-2）この数字は、1980年代の年間平均輸入量（約240トン）のうちの印鑑のために消費された量（55%、132トン）に近い数字である。よって、わずか20gの印鑑であっても、国民が大々的に所有しようとする、異常な量の象牙が消費されることが分かる。そして、これは江戸時代には考えられなかった現象である。

2.5 小結論

- 江戸時代と現代の象牙の消費形態は、根本的に異なっている。消費の実態を知るためには、その時代の社会経済状況を踏まえつつ、実際的な姿を検討する必要がある。
- 現代の特徴は、象牙の大量消費である。経済的に豊かになった国民が象牙製の印鑑や装飾品、楽器を保有するようになったため、我が国は象牙の消費大国になった。
- 一方、江戸時代には特権階級が象牙を消費したのであり、購買力のある富裕層には、一人あたり優に大型の象牙根付の1個分相当以上の象牙材が行き渡る可能性があることを示した。
- よって、貿易の絶対量について時代比較を論じたとしても、消費主体（社会階級、富裕層）の性質を視野に入れなければ、消費実態は推し量れない。つまり、輸入量が江戸時代と現代とで異なるからといって、江戸時代の象牙根付の生産がただちに否定されることには、つながらない。

第3章 明治時代の象牙材の価格について

3.1 明治時代の象牙の輸入価格

明治時代初期の象牙の「輸入数量」及び「輸入額」は、貿易統計により、年度毎にほぼ判明している。1882年から1889年までの8年間を平均した、キログラムあたりの輸入価格(輸入額(円)/輸入数量(kg))は、3.57円であった。(Esmond Bradley Martin、1985)(参考図表2)

3.2 明治時代の象牙の小売価格

袋物商や根付師が象牙材を購入して加工する場合には、貿易統計上の「輸入価格」ではなく、末端の「小売価格」を論ずる必要がある。しかし、当時の輸入業者や流通業者(象牙卸商)の粗利益率や諸経費(国際輸送費、関税等)に関して参考となるデータがないことから、本論考では輸入価格に1.2を乗じた価格を小売価格と考えることとする。

明治初期の1円の価値については、消費者物価などの推移を踏まえて現代の価値に換算すると、1円当たり現在の8,300円に相当する。「いまならいくら?」よって、明治初期の象牙の小売価格は、キログラム当たり現在の35,557円に相当することが分かる。

3.3 現在の象牙価格(その1:輸入統計より)

象牙輸入のピークを迎えつつあった1970年から1979年までの10年間における貿易統計上の輸入価格は平均約11,540円であり、小売価格として1.2を乗じた価格は、13,848円となる。(Esmond Bradley Martin、1985)(参考図表3)

3.4 現在の象牙価格(その2:オークション落札価格より)

現在の象牙材の小売価格は、インターネット上のオークションの落札結果から知ることができる。象牙材が出品されたオークションを筆者が観察した結果、落札価格はキログラム当たり平均33,678円であった。(小論考3-1)

3.5 小結論

- 明治時代初期の象牙の小売価格は、約3.56万円/kgと算出された。この価格は、我が国が象牙輸入のピークを迎えつつあった1970年代における輸入統計上の価格の約2.6倍に相当する。また、現代のオークションでの落札価格と比較しても、明治初期

の価格は、同水準又はそれ以上に高価であった。

- よって、ワシントン条約により輸入が禁止され、入手が困難となっている現代の象牙が貴重で高価であるとする、明治初期の価格も同様に高価であったと言える。とすると、大型の象牙根付を安価で大量に作らしめる程度に“明治時代の象牙材が安価であった”とは言い難い。
- “明治時代に輸入が拡大したから象牙の価格は急落し、江戸時代より安価になった。だから明治時代に大型象牙根付が大量生産された。”との説明がなされることが多いが、第1章において示したとおり、明治時代に象牙の輸入量は急増していない。よって、「輸入量拡大（供給量増加）」を理由とした象牙価格の下落は、説明にならない。

第4章 18世紀の根付製作で消費された象牙の総量について

4.1 18世紀の象牙の総輸入量

江戸時代（18世紀）の象牙の輸入量は、数百kgから10トン台であったことは既に第1章において示した。本章では、18世紀を通じて平均して年間5トンの輸入があったと仮定して、18世紀中の総輸入量を500トン（5トン×100年）と考える。

4.2 象牙根付に要した象牙材の推計方法

18世紀に製作された象牙製の根付（以下「18世紀象牙根付」という。）のために消費された「象牙材の総量」を推定する場合、当時製作された18世紀象牙根付の「個体数」をまず推定する必要がある。当時の個体数は、現存している根付の個体数を推定してから、時代を経る毎に失われる割合（現存率）を加味する方法が考えられる。

4.3 現存する“18世紀象牙根付”の「個体数」の推計

- (1) 世界の根付蒐集家の総数は、国際根付ソサエティの会員数が31カ国からの約600人であることや国内外の根付有識者からの聞き取りによれば、約3,000人存在すると推測される。(A)(小論考4-1)
- (2) 蒐集家一人あたりの根付の保有数は、約50個と仮定する。(B)(小論考4-2)
- (3) (1)及び(2)より、世界に現存している根付の総数は約15万個と推定できる。
- (4) 蒐集家のコレクションにおいて“18世紀象牙根付”とされている作品の割合は、個人コレクションを取り扱ったディーラーやサザビーズなどのオークション会社の図録を参考にすれば、16%であると推測できる。(C)(小論考4-3)
- (5) 以上より、現存している18世紀象牙根付の個体数は、2.4万個($A \times B \times C$)と推定される。

4.4 現代の18世紀象牙根付の「現存率」の推計

18世紀象牙根付は、現代まで200年以上の時代を経ながら、その多くは使用により破損したりして廃棄された。つまり、現代に残されている根付は、実際に製作された総数の一部ということになる。

18世紀象牙根付が現代まで生き残り、蒐集品として継承されている「現存率」(現在の個数/18世紀に製作された総数)をここでは3%と仮定する。すなわち、製作された100個のうち97個が失われ3個が現存している計算になる。(D)(小論考4-4)

4.5 18世紀象牙根付の「平均重量」の推計

筆者所有の18世紀の象牙根付について、個体の重量を計測した平均値は29gであった。(小論考4-5) よって、本論考では30gを「18世紀象牙根付の平均重量」と仮定することとする。(E)

4.6 根付製作における象牙材の「歩留まり率」

例えば、100kgの象牙材(原木・生牙)を輸入したとしても、その材料から100kg分の根付が生産できるわけではない。原木の状態では輸入された後は、彫刻材としては不向きな皮の部分をそげ落として、大まかな材料の固まり(ブロック)に加工することとなる。また、象牙の部位によっては、そもそも彫刻には適さない部位もある。よって、根付の重量から消費された象牙材の重量を算出する際には、材料の「歩留まり率」を考慮する必要がある。

本論考では、原木から彫刻用ブロックに切り出すことができる割合を70%と考え、ブロックを根付師が作品に彫刻した時の削りしろの歩留まりを70%と考えると、全体の歩留まりは50%と仮定することができる。(小論考4-6)(F)

4.7 18世紀の象牙根付に要した象牙材の量

以上を踏まえれば、18世紀象牙根付の製作のために消費された象牙材(原木)の総量は、48トンと計算される。

18世紀の象牙根付のために消費された象牙材の総量	$A \times B \times C \times (1/D) \times E \times (1/F)$ = 47.95 トン
--------------------------	--

A	全世界の本格的な根付蒐集家の総数	3,000人
B	蒐集家一人あたりの根付保有数	50個
C	蒐集家の蒐集における18世紀象牙根付の割合	16%
D	現代の18世紀象牙根付の現存率	3%
E	18世紀象牙根付の平均重量	30g
F	根付製作における象牙材消費の歩留まり率	50%

4.8 小結論

- 本論考では、18世紀象牙根付の総数などを推計し、18世紀中に象牙根付の製作のために消費された象牙材（原木）の総量を算出した。
- これにより、18世紀象牙根付のために「消費された象牙の総量」は、18世紀を通じて日本にもたらされた「象牙の総輸入量」の十分の一以下である可能性があることが分かった。

18世紀の象牙の総輸入量 （推計）	18世紀の象牙根付のために 消費された象牙材の総量
500トン	48トン

- すなわち、18世紀の象牙根付と現在称されているものの数は、たとえそれらのなかに近世の偽物が含まれていたとしても、江戸時代当時の象牙輸入量に鑑みて、マクロな数量としては十分に説明が可能な範囲内にある。

第5章 結論

- 前章までのポイントをまとめると次のとおりになる。

- 江戸時代（18世紀）においては、既に相当量の象牙が輸入されていた。
- 輸入量の水準は、江戸時代から明治時代に移行しても不変であり、明治時代の末期まで変わらなかった。よって、明治時代になって象牙の輸入量が急増した、という事実はない。
- 明治時代の象牙価格は、現代の価格と同水準又はそれ以上であり、高価だった。明治時代は、大型の象牙根付を安価で大量に作らしめる程度に“象牙材が安価だった”とは言えない。
- また、明治時代以降に象牙の輸入量は急増していないので、「輸入量拡大（供給量増加）」を理由とした価格下落は、説明できない。
- 江戸時代と現代の象牙の消費形態は異なることから、輸入量が江戸時代と現代とで異なるからといって、江戸時代の象牙根付の生産がただちに否定されることには、つながらない。現代の象牙消費量が異常なのであり、江戸時代の象牙輸入量は、むしろ当時の富裕層に十分に行き渡る量であった。
- 現存している「18世紀の象牙根付」と称されているものの全体数は、当時の我が国の象牙輸入量に鑑みて、十分に説明が可能な範囲内にある。

- 明治時代に“^{はま}濱もの”と称される象牙製の輸出品が数多く製作された。このことを背景として、18世紀の象牙根付に対して“明治期の作（偽物）ではないか？”と疑いの目が向けられることがある。その際の論拠は、おおむね次の類である。
 - “江戸時代には、象牙はほとんど輸入されていなかった。”
 - “江戸時代から明治時代になって象牙の輸入量が増えた。”
 - “明治時代になって輸入量が増えたから、象牙は安価になった。”
 - “明治時代の象牙の価格は、大型根付を大量生産できるほど安価だった。”
 - “18世紀の作と現在称されている象牙根付の数が異常に多い。”
 - “18世紀の象牙の輸入量は現代よりずっと少なかったのだから、象牙根付は実際にはもっと少ないはずだ。”

しかし、本論考で示したとおり、これらは説得力に欠けることが分かった。

- 江戸時代の 18 世紀中には、明治時代と同水準の量の象牙が輸入されていた。明治時代の象牙製品の製作・輸出は活発であったが、となると、18 世紀においても、明治時代と同量の象牙製品が生産されていたことになることに留意すべきである。もし、明治時代の生産が大規模だったのであれば、18 世紀の生産も大規模だったことになる。18 世紀中の象牙製品について我々の既成概念を修正する必要がある。
- もし、根付愛好家への注意喚起の目的で、疑わしい作品について問題点を指摘する必要があるのであれば、個別具体的な作品に対して指摘されるべきであろう。明確な根拠のないまま、あたかも 18 世紀の象牙根付の「全体」を暗示しつつ疑いの目を向けるのは、愛好家の間に無用の不安感を煽るものとなる。一度着せられた偽物の汚名を返上するのは、非常に難しい。本歌の可能性のある作品について、^{じっばひとから}十把一絡げに疑いの目を向けるのではなく、客観的なデータを踏まえつつ、個別かつ論理的な検証が望まれる。
- 本論考の目的は、“18 世紀の作”と称されている象牙根付について、その全てが 18 世紀に製作されたことを立証しようとするものではない。それらの中には、実際のところ、近世の作と強く疑われる、若い時代の作品が混じっていることを最後に付記しておく。

(本論おわり)

【1-1】象牙の貿易量に関する注意点

これらの輸入統計は両者とも「年間を通じた総輸入量」であることに注目したい。すなわち、個別の唐船の船荷に着目すると、積載した象牙の量にはバラツキが生じる。個別の船荷に関する象牙の積載量の多少を参考にしても、当時の我が国の象牙輸入の全体の実態を正確に表しているとは言えない。データのつまみ食いは許されない。

【1-2】グルデンの貨幣価値の換算

この 727,204 グルデンは、約 4 万両に相当する。(木田昌宏)

一両の価値は江戸時代での初期、中期、末期で異なり、また、指標とするもの(米価、一杯のかけそばなど)によっても異なるところであるが、本論考では江戸時代初期の米価と現在の米価との比較によって江戸時代初期の換算レートを一両 10 万円と仮定した。(日本銀行金融研究所 貨幣博物館)

よって、換算式は $40,000 \text{ 両} \times 0.003 \times 10 \text{ 万円} = 1,200 \text{ 万円}$ となる。

【1-3】輸入量のグラフ化

江戸期については連続的な統計データが存在しないため、正徳元年や文化元年などの輸入量を当時の平均的な数値としてグラフで取り扱った。

【2-1】江戸時代の富裕層の考え方

江戸時代の士農工商の身分制度においては、農民は奢侈品を購入することは想定されないとするれば、武士、商人、職人の一部の富裕層を対象に考えればよい。江戸時代において農民の人口は約 8 割だった。(東京書籍社) よって、江戸時代の人口の 20% に対して富裕層の割合を乗ずることとした。

【2-2】象牙製印鑑の象牙消費量

計算方法： $4000 \text{ 万} \times 0.1 \times 20\text{g} \times 1.3 = 104,000\text{kg}$

- ・通常の象牙製の印鑑(個人実印、15 ミリ丸型)の重量は約 20g である。(出典：はんこ販売業者のウェブサイトより筆者が調査)
- ・20g の印鑑 1 本を作る場合の歩留まり率を考慮すると、1 本あたり 30% のロスと仮定する。(四角形における円弧(四分の一)以外の面積 $(0.215(1-0.785))$ + 象牙の皮の部分 = 30%)

【3-1】インターネット・オークションでの象牙材の落札価格

ヤフーオークションにおける象牙材の10件の落札結果は下表のとおり。象牙材の質によって落札価格は変化するが、複数の出品事例を観察することで平均的な価格を算出することができる。なお、重量の小さな端材は、価格が安価であり、彫刻の材料としては参考とならないことから、観察の対象とはしていない。

表：ヤフーオークションにおける象牙材の落札価格

落札日時	落札金額(円)	落札重量(kg)	単位価格(円/kg)
H19.4.25	13,500	0.354	38,136
H19.4.30	3,800	0.5	7,600
H19.4.30	10,050	0.33	30,454
H19.5.2	22,500	0.33	68,182
H19.5.5	250,000	6.3	39,682
H19.5.7	150,000	3.2	46,875
H19.5.9	121,100	3.8	31,868
H19.5.10	73,000	3.3	22,121
H19.5.12	53,500	2.6	20,577
H19.5.16	109,500	3.5	31,286
平均			33,678

【4-1】根付蒐集家の総数の内訳について

世界の根付蒐集家の実数に関する統計データは見あたらない。そこで、日本根付研究会の渡辺正憲会長により海外の根付有識者にインタビューを行っていただいた結果は下記のとおりである。(聞き取りは平成19年5月にロンドンで実施)

- ・Neil K. Davey 氏 約1,500名
- ・Alain Ducros 氏 約1,700-1,800名
- ・Max Rutherford 氏(Sydney L. Moss Ltd.) 約600-700名
(ただし、serious Collectorとして)
- ・Rosemary Bandini 氏 約1,000-2,000名

根付は世界各地の美術館・博物館の機関やディーラーにおいても保存されている。また、根付を無意識に保有(死蔵)している者の数についても考慮する必要があることから、世界の根付蒐集家の内数にこれらの者を含めて考えると、蒐集家の実数は、約3,000名と考えることが可能である。

【4-2】根付蒐集家の根付保有数

根付蒐集家が保有している根付の数については、筆者が国内の根付愛好家に対してアンケート調査した結果が参考になる。平成 16 年 3 月 15 日から 3 月 21 日の期間に行ったインターネット上でのアンケート調査によると、下表の結果が得られている。27 人の平均値をとると一人あたり 28 個の平均保有数が導き出される。

よって、本論考では、本格的に蒐集する海外蒐集家や博物館の存在などを加味して、50 個を平均保有数と仮定した。

表：根付蒐集家の蒐集数

根付の保有数	該当人数
1 個～9 個	8
10 個～19 個	7
20 個～29 個	5
50 個～69 個	3
30 個～39 個	2
150 個以上	1
70 個～99 個	1
合計	27 人(平均 28 個)

【4-3】蒐集家の蒐集品における“18 世紀象牙根付”の割合

蒐集家の方針や趣向の違いから、コレクションにおいて含まれる 18 世紀象牙根付の割合はそれぞれ異なる。このため、蒐集家のコレクションを半ば網羅的に取り扱った図録から割合を算出することにより、18 世紀の作品の平均的な割合を導き出すこととした。

なお、欧米の蒐集家が 18 世紀象牙根付を特に愛好している、と指摘されることが多いことから、欧米の蒐集家の蒐集を取り扱った図録のみをここでは採用した。

表：根付蒐集家の蒐集における 18 世紀象牙根付の割合

図録名	掲載総数	“18 世紀象牙根付”	割合(%)
Christies London, Bushell part 1, 1987	350	39	11.1
Sotheby's London, Bushell, 1999	341	29	8.5
Barry Davies, Robert S. Huthart collection of Non Iwami netsuke	220	50	22.7
Barry Davies, Netsuke collection of Bosshard part 1	117	32	27.4
Barry Davies, Netsuke from Teddy Hahn	177	48	27.1

collection			
Sotheby's, Betty Jahss collection, part2, 1991	147	6	4.1
Netsuke, Hull Grundy Collection in the British Museum	610	73	12.0
Sotheby's New York, Estate of Madelyn Hickmott, 1989	306	30	9.8
Sotheby's Chicago, Floyd Segel collection, 1999	127	38	29.9
Sotheby's New York, Cornelius V.S. Roosevelt collection	341	18	5.3
Sotheby's New York, Collection of the Late Charles A. Greenfield, part2	191	24	12.6
合計	-	-	15.5

図録において“18世紀”と年代が明示されているもの採用した。

【4-4】18世紀象牙根付の現存率

(1) 京都・正直の現存率

18世紀の根付師である正直について考えれば、彼は工房型ではなく単独型の根付師であったと考えられ、生産ペースが月に2個で30年間の製作活動期間があったとすると、生涯に720個の作品を残していることとなる。

京都正直について、各種の図録などから作品データベースを構築されている日本根付研究会の渡辺正憲会長から伺った現存している京都正直銘の作品数を踏まえると、現代への現存数は4-6%と推定することができる。

当時、京都正直は『装剣奇賞』において、“象牙木彫スベテ上手最賞スベシ”と説明されているように最高ランクの作家であった。このことを踏まえれば、他の作家の作品の現存率は、京都正直を基準としてこれより低いものと考えることができる。

(2) 京都・吉長の現存率

18世紀の京都の根付師である吉長は、吉長派を形成して主に象牙根付を製作していた。吉長派の弟子(吉友、正守、吉正、吉清、吉政、吉光)による工房での助力を考慮すれば、生産効率は単独型の根付師の3倍程度と仮定する。すなわち、生産ペースは、月に6体である。こちらも30年間の活動期間とすると、吉長の根付は、2,160個となる。筆者が構築している各種図録からの吉長に関するデータベースによると、吉長銘の根付はこれまでのところ約80個が確認されている。すなわち、現代への現存数は3.8%以上と推定することができる。

(3) 震災・大火による滅失による影響

江戸時代の数次の大火や東京大空襲、関東大震災により、江戸時代の多くの工芸品が失われてきた。しかし、これらの幾たびもの火災は主に江戸（東京）において発生したものである。18世紀中には象牙根付の大半が京都・大阪で製作され、その後、日本各地に作品が分散したことを踏まえれば、18世紀の象牙根付が江戸に偏在して大火によって大きく失われたとは考えにくい。すなわち、大火などを考慮して、現存率を取りたてて低く見積もる必要性は見あたらない。

【4-5】18世紀象牙根付の平均重量

筆者所有の根付を計測した結果は表のとおり。

表：象牙根付の重量の計測結果

作 品	重量(g)
正直（京都） 雲上の麒麟	18
我楽 玉獅子	30
奉真 屋気楼（奉真彫の蛤）	40
廣葉軒吉長 鉄拐仙人	28
廣葉軒吉長 鉄拐仙人	18
廣葉軒吉長 鍾馗	34
廣葉軒吉長 猿廻し	25
廣葉軒吉長 猿廻し	33
廣葉軒吉長 猿廻し	48
廣葉軒吉長 張果老仙人	30
廣葉軒吉長 袋を担ぐ人物	27
吉友 猿廻し	33
吉友 屋気楼（奉真彫の蛤）	33
岡友 親子臥牛	34
岡友 鞠を抱える犬	20
岡言 喇叭を持つ阿蘭陀人	30
岡言 臥牛	20
岡信 屋気楼	25
計 17 個の平均値	29

【4-6】象牙材の歩留まり率

筆者による象牙商の倉庫の見学及び根付教室での製作体験に基づくもの。すなわち、100kg の象牙の原木が輸入された場合、根付作品として残っているのは、そのうちの半分（50kg）という歩留まりになる。

参考図表

表 1：明治時代以降の我が国の象牙輸入量の推移

年	輸入量 (トン)	年	輸入量 (トン)	年	輸入量 (トン)	年	輸入量 (トン)
1882	10.18	1912	46.33	1942	0	1972	275.5
1883	2.59	1913	51.59	1943	0	1973	315.64
1884	6.94	1914	33.62	1944	0	1974	233.72
1885	6.71	1915	27.77	1945	0	1975	223.79
1886	9	1916	47.31	1946	0	1976	306.79
1887	11.68	1917	48.97	1947	0	1977	266.89
1888	8.45	1918	73.52	1948	14.08	1978	368.38
1889	10.88	1919	132.24	1949	4.75	1979	296.86
1890	不明	1920	93.24	1950	28.73	1980	不明
1891	不明	1921	不明	1951	86.57	1981	不明
1892	不明	1922	78.96	1952	72.43	1982	不明
1893	9.56	1923	65.52	1953	118.49	1983	476
1894	17.13	1924	72	1954	69.28	1984	473
1895	19.45	1925	73.02	1955	55.79	1985	286
1896	20.36	1926	92.34	1956	66.62	1986	79
1897	14.48	1927	61.38	1957	67.34	1987	142
1898	22.32	1928	77.76	1958	67.33	1988	106
1899	29.73	1929	87.42	1959	71.17	1989	99
1900	24.813	1930	72.78	1960	70.99	1990	0
1901	不明	1931	65.88	1961	64.51	1991	0
1902	22.15	1932	42.87	1962	79.98	1992	0
1903	19.74	1933	60.09	1963	86.09	1993	0
1904	7.95	1934	76.9	1964	120.32	1994	0
1905	19.02	1935	72.02	1965	52.5	1995	0
1906	不明	1936	77.5	1966	83.26	1996	0
1907	不明	1937	72.14	1967	120.14	1997	0
1908	13.26	1938	16.04	1968	115.34	1998	0
1909	15.07	1939	16.92	1969	155.52	1999	50
1910	18.98	1940	16.25	1970	149.42	2000	0
1911	27.97	1941	2.86	1971	110.24		

出典：Martin, 1985, The Japanese Ivory Industry, World Wide Fund for Nature Japan 等

表 2：明治時代初期の象牙の輸入価格

年	キロあたり価格（ドル）	総輸入額（ドル）
1882	3.85	39,196
1883	4.81	12,470
1884	4.22	29,294
1885	2.96	19,863
1886	3.07	27,687
1887	3.30	38,510
1888	3.06	25,907
1889	3.28	35,675
平均	3.57	-

出典：同 明治初期の為替レートは1ドル=1円であった。

表 3：現代の象牙の輸入価格

年	キロあたり価格（ドル）	キロあたり価格（円）
1970	10.49	約 3,700
1971	16.22	約 5,700
1972	19.79	約 5,900
1973	49.17	約 14,800
1974	47.04	約 13,600
1975	49.45	約 15,000
1976	40.42	約 11,700
1977	38.74	約 10,000
1978	72.07	約 15,800
1979	83.72	約 19,200
平均		約 11,540

出典：同 各年の為替レートは考慮している。

参考文献

- ・山脇悌二郎、「長崎の唐人貿易」、昭和 39 年（1964）4 月、吉川弘文館
- ・長崎大学薬学部、「長崎薬学史」より「オランダ船がもたらしたもの」、
<http://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/history/menu.html>
<http://www.ph.nagasaki-u.ac.jp/history/history2/yunyu.html>
- ・木田昌宏（松浦資料博物館館長）長崎県文化財調査報告「平戸オランダ商館から輸入された品々と輸入額」、長崎県教育庁学芸文化課
- ・日本銀行金融研究所 貨幣博物館、「貨幣玉手箱目次」の「お金に関する Q&A」、
http://www.imes.boj.or.jp/cm/htmls/feature_faq.htm
- ・Esmond Bradley Martin , 1985, The Japanese Ivory Industry, World Wide Fund for Nature Japan, Tokyo, Japan
- ・稲葉新右衛門(1740-1786 年)、『装剣奇賞』、天明元年(1781 年)
- ・岩生成一、「朱印船貿易史の研究」、弘文堂、昭和 33 年
- ・高村光雲、『木彫七十年』、2000 年 10 月、(株)日本図書センター
- ・「人倫訓蒙図集」、平凡社（1990 年 6 月）元禄 3 年（1690 年）
- ・黒川道祐（? - 1691）「雍州府志」、貞享 3 年（1686）刊、岩波書店
- ・総務省統計局「人口推計月報」（平成 19 年 3 月概算値）人口数 1277 万人
- ・東京書籍、土農工商の身分制度における土工商の人口割合
<http://www.tokyo-shoseki.co.jp/multi/index.html>
<http://www.tokyo-shoseki.co.jp/multimedia/taiken/web-exe/db-movie-history/contents/douga/meiji/meiji.htm>
- ・「いまならいくら？」<http://chigasakioows.cool.ne.jp/ima-ikura.shtml>
明治 6 年から平成 12 年までの消費者物価指数の統計資料をつなぎ合わせた場合の物価上昇率（約 8,300 倍）を使用。

謝 辞

本論考の執筆に際しては、絶版となっている貴重な蔵書を研究のために貸し出していたいただいた WWF（世界自然保護基金）事務局に感謝します。また、世界の根付蒐集家の数に関して海外でインタビューをして下さるとともに、京都・正直に関するデータを貴重な助言や識見とともに提供下さった日本根付研究会会長の渡辺正憲氏に深く感謝いたします。